

## I-5 新宮涼庭の薬箱の検討

中村輝子・遠藤次郎<sup>1)</sup>ヴォルフガング ミヒエル<sup>2)</sup><sup>1)</sup>東京理科大学薬学部<sup>2)</sup>九州大学大学院言語文化研究院

文部科学省科学研究費補助金特定領域研究「我が国の科学技術黎明期資料の体系化に関する調査・研究」の中で私たちは江戸・明治時代初期の薬と医療器具の調査を進めている。これまでに六十点余りの薬箱を調査する機会に恵まれた。しかしながら、この中には由来が明らかな蘭方医の薬箱は少ない。その点で、蘭方を志した新宮涼庭（一七八七〜一八五四年）の薬箱は貴重な資料である。この薬箱は二〇年ほど前までは新宮家に伝わり、現在は別の方の所蔵となっている。

薬箱は横二六二、奥行き一七一、高さ二九三（ミリメートル）、五段からなり、下の四段は引き出しであり、最上段には蝶つがいのついた上蓋がある。

箱の前・後面に螺鈿で文章がはめ込まれ、前面には「解三元氣者／何自然運行／也醫之臨病／視自然運行／所欲何如耳／天保甲辰秋／鬼國山人 涼庭」、後面には「De doctor is dienar der natuur / 自然 / 譯曰人身 / 有元氣者醫 / 之巧者唯其 / 奴隸」とある。鬼國山人は新宮涼庭の号であり、天保甲辰は天保十五年（一八四四）にあたる。箱に記された蘭文を直訳すれば「医師は自然の下僕である」となる。また、漢文は「訳して曰く。人身は、本来、元氣がある。医師の技は、ただ、その奴隸にすぎないと」、「解して云う。元氣は何れも自然の運行である。医師は病に臨んで、自然の運行の欲するところが如何なるを視るのみである」とと読める。このような言葉を江戸時代の蘭方医が各所に記していたことを阿知波五郎先生が指摘しておられる（蘭学期の「自然」と「医は自然の臣僕なり」との出典について、日本医史学雑誌二二巻三三一頁、一九七六年）。

薬箱の最上段には薬瓶二八本と調剤器具（薬匙、ガラス製乳鉢・乳棒、メートルグラスなど）が収められ

ていた。薬瓶には内容物はないが、四本には以下の薬物名が記されていた。「蓆酸施」(シユウ酸セシウム)、「硫亜鉛」(硫酸亜鉛)、「水製ホミカエキス」、「臭素安」(臭化アンモニウム)。これらの薬物名を現段階では江戸時代の薬物書に見出してはいない。あるいは明治期に使われた薬物かもしれない。

引き出しの最上段には二六袋の薬袋が収められていた。その内訳は、生薬名を記したものが一七袋(亜刺比亜、辰礪、阿子、酸棘、良姜、川烏、没薬、□、カ|ンタアリス、蔓荆、伏龍、罌賊、薏苡、山査、乳香、芍、棗)、製剤名を記したものが八袋(齊世丸、獨歩丸、三黄丸、薄色散、金黄散、梅肉丸、星風散、朱礬散)、ラベルが剥がれていて不明のものが一袋であった(傍線を引いた袋には生薬が残っていた)。この内、アラビアゴム、カンタリス、没薬、乳香、罌粟殻などは蘭方ではしばしば用いられる薬物である。一方、三黄丸・朱礬散・梅肉丸などは漢方にみられる処方である。収められている生薬と製剤は全般的には収斂・止血・鎮痛作用を示すものが多い。

二段目の引き出しには甘隨と記された薬袋、ヒスト書かれた和紙に包まれてヒストルメス、和紙に包まれた麻糸、麻紐が収められていた。甘隨は甘遂と思われ、神農本草經に記された漢薬であり、強い利水・緩下剤である。

三段目の引き出しには、布のサックに入った舌押、ラスバラトリウム、大きさの異なる烙鉄が二本、細い竹筒の中には先端の形が異なる三本の小鋭鉤、硯箱の中に硯と筆、和紙が収められていた。

四段目の引き出しには、人參、附子、礬の三つの木箱があった。礬は礬石(カリウムとアルミニウムの硫酸塩鉱物)と思われ、漢薬でもあるが、一方、ヨーロッパでも収斂剤・止血剤として古くから使われた薬物である。

この薬箱に関しては漢薬ではあっても漢方の古典的な使い方がされたとはいえない。薬箱の検討だけからは正確な使い方を伺い知ることができず、今後、新宮涼庭の処方録と比較しながら、具体的な治療法を調べていきたい。